

## 主体的・対話的で深い学びの指導と評価の在り方についての研究

～英語でまとまりのある文章を書く力を伸ばすために「どのように学ぶか」に焦点を当てた授業改善～

高知県立安芸中学校 教諭 津野 賀名子  
高知県教育センター 指導主事 竹本 佳奈  
上田 妙

本研究の目的は、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」に焦点を当てて授業改善を行い、生徒の「主体的・対話的で深い学び」を通して、英語でまとまりのある文章を書く力を伸ばすことであった。生徒がまとまりのある文章を書こうとする際の課題である内容と正確さのうち、内容に焦点を当てた指導を行い、「主体的・対話的で深い学び」となるように言語活動を設定した。

生徒の「主体的・対話的で深い学び」を意図して設定した言語活動に取り組みせることで、まとまりのある文章を書く力は伸びたと言える判断した。学習到達目標と関連付けた計画と評価の基準（ルーブリック）を指導者間、指導者と生徒間で共有することが必要不可欠であることが分かった。

### 〈キーワード〉

まとまりのある文章、J-E エクササイズ、モデル文、伝える情報や内容の整理、ルーブリック評価

## 1 研究目的

### (1) 今、求められている英語教育

文部科学省は「中学校学習指導要領」（平成29年3月31日告示）において、外国語科の目標を「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」と示し、育成を目指す資質・能力の三つの柱である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」のそれぞれに関わる教科の目標を明確に設定している。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」は「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、目的や場面・状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」と示されている（中学校学習指導要領解説外国語編 平成29年7月）。

「中学校学習指導要領解説外国語編」（平成29年7月）においては、指導計画作成上の配慮事項として、「(1)『知識及び技能』が習得されること、(2)『思考力、判断力、表現力等』を育成すること、(3)『学びに向かう力、人間性等』を涵養することが偏りなく実現されるよう、単元など内容や時間のまとまりを見通しながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことが重要である」ということと、「3学年間を通じて外国語科の目標の実現を図るため、各学校における生徒の発達の段階と実情を踏まえ、学年ごとの目標を適切に定めることの必要性」等が述べられている。また「今回の改訂では、外国語科の目標について、育成を目指す資質・能力を明確にした上で、各学校段階の学びを持続させるとともに、『外国語を使って何ができるようになるか』という観点から改善・充実を図っており、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして五つの領域別の目標を設定している。学年ごとの目標を、学習指導要領を踏まえて各学校が設定する『学習到達目標』として生徒に求められる英語力を達成するための具体的な形で設定する取組は、既に各学校で行われているが、上記のように、今回の改訂で領域別の目標が明確に示されたことにより、その目標と関連付けられた学習到達目標とする必要がある。」としている。現行の学習指導要領解説においても、3学年間を通じて目指すべ

き外国語科の目標が示されており、各学校が生徒の学習の実態に応じて学年ごとの目標を設定することが適切であるとされていたが、今回の改訂ではさらに、学習到達目標が五つの領域別の目標と関連付けられたものにする必要があることが明示されている。

「学習到達目標」については、「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策（平成23年6月）」において、各中・高等学校が学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で具体的に設定することについて提言がされた。これを踏まえ、文部科学省は「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DOリスト』の形で学習到達目標設定のための手引き」（平成25年3月）において、各学校で具体的な指標を設定することを求めた。また同手引きの中で、評価についても「学習到達目標に対応した学習活動の特質等に応じて、多肢選択形式等の筆記テストのみならず、面接、エッセー、スピーチ等のパフォーマンス評価、活動の観察等、様々な評価方法の中からその場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択することが重要である。」と示している。

## (2) 高知県とA中学校の高知県学力定着状況調査（平成29年1月実施）の結果から

県全体の平均正答率は中学1年生で52.0%、中学2年生で43.9%であった。両学年とも特に「書くこと」における正答率が低く、1年生で平均正答率34.5%、2年生で15.1%であった。高知県教育委員会は「学力向上検証改善サイクルの確立に向けて—平成28年度高知県学力定着状況調査結果の概要—」（平成29年3月）の中で「獲得した知識や技能を日常生活の場面に当てはめて課題解決の方法を考えることや、知識技能を活用して問題を解決する力、また、論理的に表現する力については、まだ課題が残る状況」としている。

研究協力校であるA中学校の1年生は平均正答率68.2%、同じく2年生は46.3%で、「書くこと」における正答率は1年生で平均52.4%、2年生で12.9%であった。分析結果で見ると、1、2年生ともに「資料を基に、文と文のつながりなどに注意して正しく文を書く」ことに課題があることが分かった。これまでの学習指導は、「何を知っているか」という知識・技能の習得に重点を置くことが多く、「どのように学ぶか」という側面が不足していた。生徒は語彙や文法などの知識はある程度身に付けているが、その知識を活用する「思考力・判断力・表現力」が弱く「深い学び」とはなっていなかったと考えられる。場面を設定した中での言語活動には取り組ませてきたものの、学習した内容をどのように活用すればよいか、生徒自身が主体的、対話的に考えて言語活動を行う機会を設定できていなかったことが反省点である。

## (3) A校2年生の現状と課題

平成29年6月に第2学年全生徒52名を対象に実施した英語学習に関する調査によると、英語が好きかという問いに「とても好き」、「まあ好き」と肯定的に回答した生徒は全体の80.7%、英語の4技能（聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと）それぞれの活動が好きかという問いには、「読むこと」に肯定的に回答した生徒が最も多く88.4%、「書くこと」に肯定的に回答した生徒は67.3%であった。それぞれの技能が身に付いているかという問いには、「聞く力がある」に肯定的に回答した生徒が59.6%と最も多く、「書く力がある」に肯定的に回答した生徒は48.1%と最も少なかった。この調査から、「書くこと」は好きだと感じているものの「書く力」が付いていると感じている生徒は少ないことが分かる。また、「英語で書くときに困ること」に関する質問では、「単語や文法（表現）が分からない」、「まとまりのある文を書く方法が分からない」といったことに困っている生徒が多いことが分かる。これらの要因として、「スペルや文法を覚えていない」、「伝えたい内容を英語でどう表現するか分からない」という知識・理解に関するものと「まとまりのある文章がどういうものか分からない」、「まとまりのある文章を書く経験が少ない」という文章の形式に関するものが考えられる。

A校の生徒の書く力の現状を、好きな月とその理由について書かせたライティングワークシートから見ると、ほぼ全員がどの月が好きかという意見文は書こうとしていたものの、その理由に

については、読み手に十分に伝わらないものが多かった。理由が1文しか書かれていなかったり、複数書いていても単に1文ずつで理由を羅列してあるだけだったり、理由についての説明が不足しており、情報が少ないと感じた。意見文とその理由をしっかりと書いてあり、まとまりがあると感じられる文章を書いている生徒は52名中6名であった。この結果から、A校の生徒の多くは「まとまりのある文章を書く力」が十分に付いていないと考える。

#### (4) まとまりのある文章

平成24年1月に実施された国立教育政策研究所教育課程研究センターによる「特定の課題に関する調査（英語：『書くこと』）」の中で、文と文のつながりに注意してまとまりのある文章を書く力について調査が行われており、「内容のつながり」を観点に設定している。この調査では「内容のつながりがよいものとは、『①話題の一貫性があり、他の話題に脱線していないもの』『②同じ内容の文を、無用に繰り返していないもの』『③内容理解に支障を来すような、語順・時制等の誤りがないもの』の全てに当てはまる場合である。」とされている。また同調査では、誤答分析をより細かく行うために「内容のつながりが悪いもの」を「文章としての適切さを欠くもの」（前述①・②の場合）と「文構造等の誤りがみられるもの」（前述③の場合）に分けている。調査の結果では、「内容のつながりが悪いもの」のうち、「文構造等の誤りがみられるもの」が約6割を占めた。

文部科学省は「中学校学習指導要領解説外国語編」（平成29年7月）において、『まとまりのある文章を書く』とは、文と文の順序や相互の関連に注意を払い、全体として一貫性のある文章を書くことを示している。『導入—本論—結論』や『主題—根拠や具体—主題の言い換えや要約』など、文章構成の特徴を意識しながら、全体として一貫性のある文章を書くことができるようにすることが重要である。さらに、出来事や事実を描写したり、考えや感想を述べたりする場合において、よりよく読み手に伝わるよう意識しながら、自分の言いたいことに最もふさわしい表現形式を工夫して書き表すことができるようにすることも必要である。」としている。

また大井・田畑・松井（2008）によると、英語の文章を特徴付ける重要な要素として、「結束性」と「論理の一貫性」が挙げられており、英語らしい文章が書けるようになるにはこの二点について習熟度を高める努力が必要とされている。二つの要素のうち「結束性」は、指示、代用、省略、接続関係、語彙の関連の五つの仕組みからもたらされるとしており、新学習指導要領における「文と文の順序や相互の関連」に当たると考える。

A校で実施したライティングワークシートの中で、まとまりがあると感じられる文章が書けていた生徒はわずかであったが、彼らに共通する記述には、「〇月が好き」という意見文とその理由が1～2文あることに加えて、その理由を説明する文や具体例などが含まれていたことにより、発信される情報が増えて説得力が増し、文章のまとまりを感じさせる要因になっていた。

これらのことを踏まえ、本研究ではまとまりのある文章を以下の条件を満たすものと定義する。

- ア 言いたいことを相手に伝えるために十分な内容や情報がある。
- イ 内容や情報の順番が整理されている。
- ウ 接続詞や代名詞を使うことや上位語と下位語を使うことなどにより、つながりのある文で構成されている。
- エ 全体として一貫性のある文章である。

#### (5) まとまりのある文章を書く力を伸ばすために

及川（2010）によると、英作文を通じて中学生の英語熟達度が学年進行とともにどのように発達・進行するのかを検証したところ、「量と複雑さが上昇し、続いて正確さが上昇するという傾向が観察された。」として、「まず、初級段階である1、2年生は量を重視し、より多くの英語を書くことを奨励し、3年生へむけて徐々に正確さを求める指導に切り替えてゆく。」という指導手順を示している。そこで本研究では、語彙や英文の正確さよりも、書く量を増やすことに重点を置いて指導する。そのうえで、A校の2年生が「英語で書くときに困ること」の知識・理解に関す

る課題と文章の形式に関する課題に働きかける。

知識・理解に関する課題に対しては、これまでのような正確さを求める単語テストや小テストで知識・理解の定着を図ることにとどまらず、既習の知識を活用させる機会を与えることで、活用の仕方を身に付けさせたいと考える。そのためにJ-Eエクササイズ<sup>1</sup>という活動を取り入れる。J-Eエクササイズを活用して表現する練習を通して、自分の伝えたいことは何なのか、自分自身で発信したい内容の本質的な意味を捉え、既習の言語知識を活用することで、実際のコミュニケーションでそれらを運用できる力につながると考える。

また文章の形式に関する課題は、モデル文を参考に英作文させることで、自分自身の発信したい内容を伝えるためにモデル文と自分自身とを結び付けて考えたり、比べたりしながら、まとまりのある文章の構成の仕方を学ぶことで解消できると考える。さらにマッピングを用いることや自分の書いた文章を振り返ることで、目的や場面、状況に合わせて伝える内容や情報を整理する力を付けることにより、構成を意識してまとまりのある文章を書くことにつなげたい。

このように本研究では、「何を知っているか」という視点だけでなく、「どのように学ぶか」という視点をもって授業改善を行い、生徒の「主体的・対話的で深い学び」を通して、A校の生徒の多くがつかずいている「まとまりのある文章を書く力」を伸ばすことを目的とする。

## 2 研究仮説

J-E エクササイズを活用して英語で表現することを練習したり、生徒にとって具体的で分かりやすい目的や場面を設定した言語活動において、モデル文を参考に英作文したり、伝える情報の順番を整理したりしながら書く経験を積み重ねていく。そうすれば、生徒は既習の言語知識で表現できるようになったり、モデル文から文章の構成の仕方を学んだりして、構成を意識してまとまりのある文章を書けるようになるだろう。

## 3 研究方法

### (1) 研究計画

日程	内 容
6月	○生徒の意識や課題の把握 英語学習に関する生徒の意識、「書くこと」におけるつまずき等、実態を把握する。生徒の実態に即した課題を設定するためや検証授業の計画を立てるための資料とする。 ア 事前アンケートとして質問紙による意識調査、ライティングワークシートを実施する。 イ 平常時の授業を参観し、生徒の様子から現状を見取る。 ウ 昨年度の「書くこと」の学習状況について教員から聞き取る。
7～11月	○事前指導 ア 帯活動において、スピーチを行い、その後話した内容を書く。(トピックライティング) イ 継続的な取組として、日記を書く。
11月	○検証授業 ○検証授業後の事後アンケートとして質問紙による意識調査、ライティングワークシートの実施 授業後に英語学習に関する生徒の意識に変化があったかを検証する。また生徒の書いた作品と抽出生徒への聞き取り調査からも生徒の変容を見取る。

### (2) 事前指導の概要

ア スピーチとその内容を書く活動 (トピックライティング)

帯活動で、ペアでお互いに自分自身のことや身近なことに関するトピックについて1分間スピーチをする。最初の2～3回はスピーチのみを行い、まず話すことにより意見や考えなどを表

<sup>1</sup>生徒は英語で文章を書くとき、日本語で文を作り、それを翻訳するという手順を踏む。当然のことながら、英語よりも日本語能力の方が高く、頭に浮かんだ日本語の文は、語彙においても文法の複雑さにおいても、英語の能力を超えたものになっている。その日本語の文をそのまま英語で書こうとするため、英語で文章を書くことができないことの原因となっている。J-Eエクササイズとは、この頭に浮かんだ日本語の文で言いたいことは何かという意味に焦点を当てて、「宿題に追われる」→「宿題がたくさんある」、「先生が宿題をたくさん出した」のように、日本語でできるだけ多く言い換える練習である (内田, 2015)。

現することに慣れさせて、次に話した内容を「書くこと」につなげていく（トピックライティング）。2～3分程度で書くこととし、スペルや文法などの正確さよりも内容が伝わりやすい文章になっているかという点に重点を置く。またその視点で内容に対する相互チェックもペアで行わせる。トピックは1週間ごとに変更し、同じテーマについて複数回取り組めるようにし、授業ごとにペアを変えて行う。

#### イ 日記を書く活動

継続的な取組として、日記を書かせる。夏季休業中や週末の課題として取り組ませ、まとまりのある文章を書くことに慣れさせる手立ての一つとする。前述同様、正確さよりも積極的に書くようとしているかに重点を置く。間違いの添削はせず、書いている量や内容の変容に注目し、コメントによるフィードバックを与えて「書くこと」への意欲を育てる。

### (3) 検証授業の概要

A中学校第2学年(52名)を対象に実施する。使用教科書及び単元はNEW CROWN 2 ENGLISH SERIES New Edition Lesson 6 My Dream で、全8時間計画である。不定詞の3用法(名詞用法、副詞用法、形容詞用法)を扱った単元であり、中学校学習指導要領における指導事項「書くこと一(オ)自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。」を目指す指導事項と設定する。A校第2学年の「書くこと」における学習到達目標は「既習の表現を使って、町紹介を書くことができる」である。

本単元の学習を通して、「書く力」が付いていると感じている生徒が少ないことの要因として考えられることのうち、「伝えたい内容を英語でどう表現するか分からない」、「まとまりのある文章がどういうものか分からない」、「まとまりのある文章を書く経験が少ない」という課題を解消していくために次の3点に重点的に取り組む。J-E エクササイズを活用し、既習の言語知識を使って英語で表現できるという感覚を育てる。複数のモデル文を提示することにより、まとまりのある文章の形を示す。継続的に3～4文以上の文章を書かせる。

検証授業と「主体的・対話的で深い学び」との関連について述べる。

#### ア 主体的な学び

「ALTに行きたいと思ってもらえるような町紹介をまとまりのある英文で書く」という具体的な単元ゴールを設定し、単元の最初に生徒と確認して単元終了時をイメージできるように上級生のモデル作品を提示する。学習の流れへの見通しをもたせて、単元を通して身に付けたい力や単元の活動の意図を理解すれば、目標を達成するために努力や工夫をしながら学習に向かうと考える。具体的に相手を設定することで、「書くこと」が一方通行の行為ではなく読み手がいるということを意識し、自分の考えを伝えたいという気持ちを高められるとともに、どのように書けばよいかを考え、相手によりよく自分の考えを伝えるための工夫ができると予想される。またできあがった紹介文をALTに読んでもらい、一番行きたいと思ったものを選んでもらうことで相手に伝えたいという意欲をさらに高められると考える。

#### イ 対話的な学び

友だちや教師と対話したり、自分や友だちが書いたものを読んだりすれば、一人で取り組むときよりも多くの情報を得られ、自らの思考を深めることにつながると考える。そこで個人で考えさせた後には、ペアで相談・確認をさせる場面を設定する。教科書本文を扱う際には、教師との英語によるやりとりを通じて内容の理解を促す。また単元ゴールの町紹介を書く活動においては、友達の書いた文章をまとまりのある文章に必要な要素が含まれているかという視点で読ませて、相手に自分の考えを分かりやすく伝えるための表現や工夫を参考にさせ、自分の書いた文章を再構成させる。

#### ウ 深い学び

単元ゴールの対象をALTに設定することで、文章を書く際の相手への配慮が具体的になる。生

徒は自分の伝えたいことをどのように表現すれば相手に分かりやすくなるのかを考える中で「見方・考え方」を働かせることになり、思考が深まると考える。また帯活動として取り組むJ-Eエクササイズを通して、伝えたいことの意味に焦点を当てて考えることで、場面や状況を判断し、既習の言語知識を活用できるようになる。既習の言語知識が活用される場面を意図的に仕組み、実際のコミュニケーションで運用できる力を養っていく。

#### (4) 評価

単元ゴールの活動である町紹介ライティングを評価するために、まとまりのある文章の定義(1(4))を用いて、表1のようにルーブリックを設定した。項目イとエについては、内容や情報の順番が整理されているものは一貫性のある文章と言え、一貫性のある文章は内容や情報の順番が整理されていると言えることから、一つの項目にまとめて評価することとした。正確さは評価の対象とせず、書いた量と内容について、研究協力校の英語科担当教員と複数で評価を行う。なお、このルーブリックは検証授業前後のライティングワークシートの変容を見取るためにも使用する。

表1 ルーブリック

項目	ア 言いたいことを相手に伝えるために十分な内容や情報がある。	イ 内容や情報の順番が整理されている。 エ 全体として一貫性のある文章である。	ウ 接続詞や代名詞を使うことや上位語と下位語を使うことなどにより、つながりのある文で構成されている。
A	自分の考えや感想等を含めていたり、副詞句や節を使用していたりして、より詳しい内容や情報が複数ある。	話題の一貫性があり、内容や情報が整理されていて、読み手に伝わりやすくなっている。	接続詞や代名詞を使うことや上位語と下位語を使うことなどにより、つながりのある文で構成されている。
B	自分の考えや感想等を含めていたり、副詞句や節を使用していたりはしないが、内容や情報が複数ある。	ほぼ話題の一貫性があり、内容や情報が整理されているが、一部、読み手に内容が伝わりにくい部分がある。	接続詞や代名詞を使うことや上位語と下位語を使うことなどにより、つながりのある文で構成されているが、うまくつながっていない部分がある。
C	単純な情報はあある。	話題に一貫性がなく、内容や情報が整理されておらず、読み手に内容が伝わりにくい。	文と文のつながりがなく、文が羅列されている。文と文のつながりが少ないところが多い。

## 4 結果と考察

### (1) 単元ゴールの活動(町紹介)のルーブリック評価

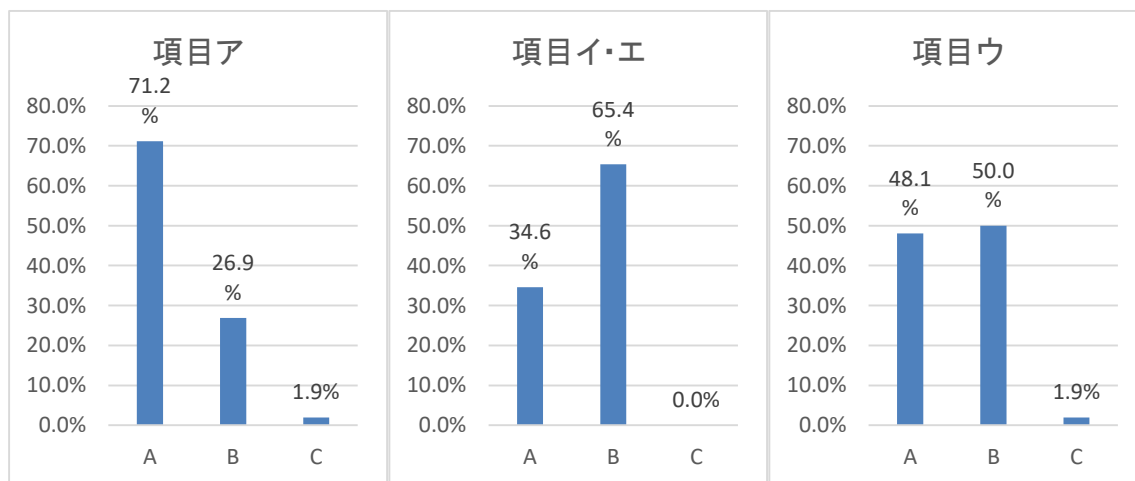


図1 町紹介のルーブリック評価の分布

検証授業の単元のゴール「ALTに行きたいと思ってもらえるような町紹介」のライティングをルーブリック(表1)を用いて評価した結果は、図1の通りであった。項目ア「言いたいことを相手に伝えるために十分な内容や情報がある」については、A評価の生徒が7割を超えていた。町紹介ライティングは単元の学習を積み重ねたうえでの取組であり、アイデアを広げるために十分な時間があったことに加え、ALTに自分のおすすめの場所を紹介するという生徒にとって具体的で分かりやすい場面設定をしたことで相手意識をもち、何をどのように伝えるかということを考えながら書く

ことができ、情報量が増えて相手に伝えるための内容が十分あったと考える。項目イ「内容や情報の順番が整理されている」と項目エ「全体として一貫性のある文章である」については、A評価の生徒は34.6%だった。残りの65.4%はすべてB評価であり、話題の一貫性がなく、内容や情報が整理されていない文章を書いた生徒は一人もいなかった。生徒の作品にはモデル文を活用しているものが多く見られ、自分の伝えたい情報を表現するためにモデル文と自分のアイデアとを結び付けながら書くことができていると感じた。「導入」－「おすすめの場所または理由の数の提示」－「具体的な内容」といった構成についてモデル文が活用されており、内容や情報の順番が整理された文章になっていた。また帯活動のトピックライティングや日記を書く活動から一つの話について話を広げていくということを学んでおり、概ね一貫性のある文章を書くことができている。項目ウ「接続詞や代名詞を使うことや上位語と下位語を使うことなどにより、つながりのある文で構成されている」については、A評価の生徒は48.1%、B評価の生徒は50.0%で、ほとんどの生徒がつながりを意識して書こうとしていることがうかがえる。項目ウにおいても、場面設定が明確であったことで、読み手に伝わるように書くためにはどうすればよいかを考え、既習の言語知識を活用しながら書いた結果であると推測する。

## (2) ライティングワークシート「好きな月とその理由」のルーブリック評価

ライティングワークシートについて、検証授業前後の変容を見たところ、図2のような結果となった。なお、文の数が3文より少ないものについては、十分な内容があるとは言い難く、一貫性のある文章やつながりのある文で構成された文章という判断をしかねるため、ルーブリック評価のA～C評価に加えて、ここではD評価とした。

6月の調査では文の数が平均 3.35 文、語数が平均 17.83 語であった。11月の調査では文の数の平均が 5.73 文、語数が平均 30.48 語とまず書く量が増えていた。ルーブリック評価においては、A評価の割合がどの項目においても増えていた。B評価については、項目イとエにおいて増えていた。また、C評価の割合も増えていた。これは6月にはD評価であった生徒が、11月の調査で書く量は増えたものの、まとまりを意識して文章を書くという段階までは到達しておらずCと評価されたためである。

項目ごとに見ると(図2参照)、項目ア「言いたいことを相手に伝えるために十分な内容や情報がある」については、A評価の生徒が23.1%から50.0%と26.9%増加していた。これはトピックライティングや日記を書く活動を通して内容のある文章を書くことに慣れたことと、学習が進むにつれて使える単語や表現が増えたことで書く量も増えたということが考えられる。項目イ「内容や情報の順番が整理されている」と項目エ「全体として一貫性のある文章である」については、A評価の生徒は13.5%から23.0%と9.5%増加し、B評価も38.4%から50.0%と11.6%増加している。検証授業において、マッピングで伝えたいことなどの情報を整理しながら書いたことや、モデル文

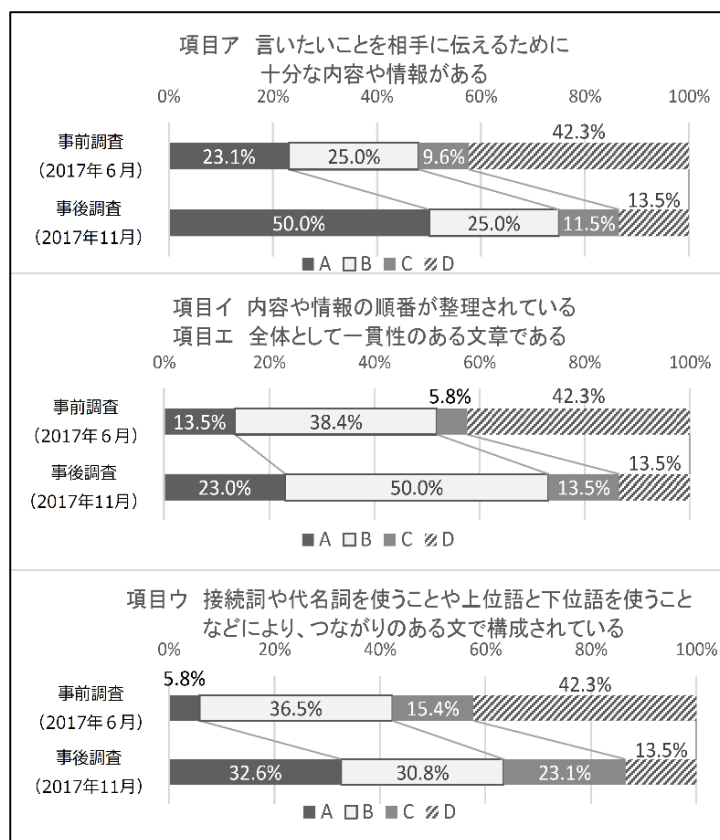


図2 ライティングワークシート（事前・事後調査）のルーブリック評価比較

を参考に英作文する活動から、文章の構成の仕方を学び、文章にまとまりをもたせて書くことができるようになったと考える。また友達の書いたものを読んだり、コメントしたりする活動もまとまりのある文章の構成の仕方を学ぶことに効果があったと思われる。項目ウ「接続詞や代名詞を使うことや上位語と下位語を使うことなどにより、つながりのある文で構成されている」については、A評価の生徒は5.8%から32.6%と26.8%増加し、伸びは大きい。その要因として、接続詞の使用が増えたことが挙げられる。これは検証授業前の6月の時点では学習したばかりであった接続詞がモデル文や教科書本文の中で繰り返し示されたり、生徒が書く際や話す際に繰り返し使用したりして、その用法が定着し、適切に使用できる生徒が増えたと思われる。

### (3) 抽出生徒の書いた文章の変容

抽出生徒の書いた文章の変容を示す。なお、スペルや文法等のミス、改行もすべて生徒が書いた原文のままである。

<p><b>6月</b> ライティングワークシート (好きな月とその理由) I like June. My birthday is June seventh. I eat a cake and I get some presents.</p>	<p><b>7月</b> 日記 I'm on the soccer team. I went to Kagawa for soccer game. I was very nervous. We lost a soccer game. ①Then we went to a hotel. I was sleepy. ②Because I went to bed at ten.</p>	<p><b>10月</b> トピックライティング トピック: About the English tests. It was good. When I studied English for test, I feel very tired. I studied English for test many times. So I got good points. ③I will continew it.</p>
<p><b>11月</b> ライティングワークシート (好きな月とその理由) My favorite month is Jun. I have two reasons. ④First, my bearthday is Jun seventh. ⑤So some friends give me some presents. ⑥I was very happy. ⑦Second, I can eat a cake. I like cake. ⑧It's very delicious. My bearthday is fun. I like Jun.</p>	<p><b>11月</b> 町紹介 I will tell you about three good places in Kochi. ⑨First, Hamazushi is in Nankoku city. It's a conveyer belt sushi bar. I sometimes go there to eat sushi. It has many kinds of sushi. We can eat noodles and sweets too. I like salmon and tuna. I think sushi of Hamazushi is more delicious than sushi of Sushiro. Please go to Hamazushi. ⑩Second, My city, Aki. Aki city has a stadium to play baseball. ⑪Do you know Hanshin Tigers? It's a professional baseball team in Japan. They sometimes come to the stadium. I don't like playing baseball but I like watching baseball. My favorite team is Hanshin Tigers, So when they won, I was happy. Please come to Aki city. ⑫Last, Nankoku sports center to play some ⑬sports. I'm a member of the ⑭soccer team. Our team ⑮practices soccer there. It has a big ground. There is a big gym too. We can do a lot things there. Some people run there. Others play sports. Let's get some exercise there.</p>	

図3 抽出生徒Aの書いた文章の変容

抽出生徒Aの書いた文章は、比較的ミスは少ない。6月の時点では、分量が少なく、読み手が納得できるような理由を書けていない。7月の日記では、配付したプリントのモデル文を活用し、接続詞の使用が見られるようになった(下線部①、②)。Becauseの使い方は間違っているが、生徒Aの言いたいことは伝わる文である。10月のトピックライティングでは、生徒Aがしたことだけでなく、これからのことも含めてまとまりのある文章を書くことができている(下線部③)。11月の好きな月とその理由を書いたライティングワークシートは6月のライティングワークシートと比べると分量が増えている。また教科書本文などから文章の構成を学び、理由がいくつあるかを提示してから、町紹介と同じようにFirst、Secondという語を用いて理由を順番に示している(下線部④、⑦)。接続詞Soの使用や感想を含めることで、文と文につながりが感じられる文章になっている(下線部⑤、⑥、⑧)。11月の町紹介ライティングは、ルーブリック評価はすべてAであった。ルーブリッ



クの項目アについては、自分の経験が含まれており、副詞句や節も使用しておすすめの場所について詳しく説明している。読む人への問いかけがあることや阪神タイガースについての説明がある(下線部⑩)など、ALTにすすめるということ意識して書けていることが分かる。項目イ・エについても、三つの場所を紹介しているが、それぞれの紹介には一貫性があり、話が脱線することはない。またモデル文にもある First、Second、Last という語を用いて内容が整理されている(下線部⑨、⑩、⑫)。項目ウについては、代名詞や定冠詞の the を用いること、sport、soccer、practice のような関連のある語を使用すること(下線部⑬、⑭、⑮)で、文と文につながりをもたせて書かれた文章であると言える。また、モデル文を参考にして、自分の伝えたいことが表現できている。

<p><b>6月</b> ライティングワークシート (好きな月とその理由) My favorit month is August. ①Because it have the summr vocation and I like summr. I don't like cold but I like warm and hot. We can swim in the sea in summr.</p>	<p><b>7月</b> 日記 I practiced the clarinet from a.m. nine to p.m. four. I enjoyed it. I'm going to practice the clarinet. I want to play it very well.</p>	<p><b>8月</b> 日記 I did Janise homework in the evening. After dinner, I did English homework. ②It was hard. ③I'm going to do math homework tomorrow.</p>
<p><b>11月</b> ライティングワークシート (好きな月とその理由) I like August. ④I have three reasons. ⑤First, We can swim in the river. ⑥Second, We have a summer vication in August. We have a summer festival in August 15th. We enjoy it. ⑦Third, I can meet my aunt and my uncle. I like them because they are very kind. ⑧So, I like August.</p>	<p><b>11月</b> 町紹介 My favorite towns are Umaji Village, Yasu town and Aki City. I will tell you about there. ⑨First town is Umaji Village. ⑩Do you know "Gokkun Umajimura"? It is a very delicious drink. It is made from Yuzu. ⑪Yuzu is sour fruit. Gokkun Umajimura is from Umaji Village. It is very famous in Kochi. It is smells sweet. If you want something to drink, please buy Gokkun Umajimura. You will be happy because it is delicious. ⑫Second town is Yasu Town. Yasu Town is famous for fruit tomatoes, emerald melons and ルナビエナ watermelons. My parents grow fruit tomatoes to buy. Elementary school children learn about them in Yasu. I learned about them when I was an elementary school child. They are very delicious. Please buy them. ⑬Last town is Aki City. There is an eggplant park in Aki City. It is popular in Kochi. Every year, Aki High School students go on a school excursion to the park. When I was young, I always said, "I want to go an eggplant park." I like there now. You will be happy if you go there. Please go to an eggplant park.</p>	

図4 抽出生徒Bの書いた文章の変容

抽出生徒Bの書いた文章は、6月の時点で接続詞 Because を使用し、意見文を支える理由が書かれている(下線部①)。しかし、理由の後に続く2文のつながりは読み取りづらい。7月の日記では、主語がすべてIでやや単調ではあるが、一貫してクラリネットの練習について書かれた文章である。8月の日記は、配付したプリントのモデル文の活用が見られる。宿題をしたことだけでなく、宿題に関する感想(下線部②)と今後の予定(下線部③)について書かれており、まとまりのある文章になっている。11月ライティングワークシートは6月のライティングワークシートと比べると文量が増えている。文章の構成については、抽出生徒Aと同じく、初めに理由の数を提示してから(下線部④)理由を順番に示すこと(下線部⑤、⑥、⑦)で文章を整理していることがうかがえる。また結びにはSoという言葉を用いて(下線部⑧)、この文章における主張である8月が好きということを再度示し、結論としている。11月の町紹介ライティングは、ルーブリック評価はすべてAであった。ルーブリックの項目アについては、抽出生徒Aと同じく自分の経験を含めて書いており、おすすめの場所について詳しく説明している。問いかけ(下線部⑩)やゆずについての説明(下線部⑪)があり、ALTという読む人を意識して書けていることが分かる。項目イ・エについても、三つの場所の紹介にはそれぞれ一貫性があり、話は脱線していない。またFirst town、Second townのように順序を示して内容を整理している(下線部⑨、⑫、⑬)。項目ウについては、代名詞や繰り返し同じ語を使用することで、文と文につながりをもたせている。

#### (4) 英語学習に関する意識調査

ア 生徒全体への質問紙調査の変容

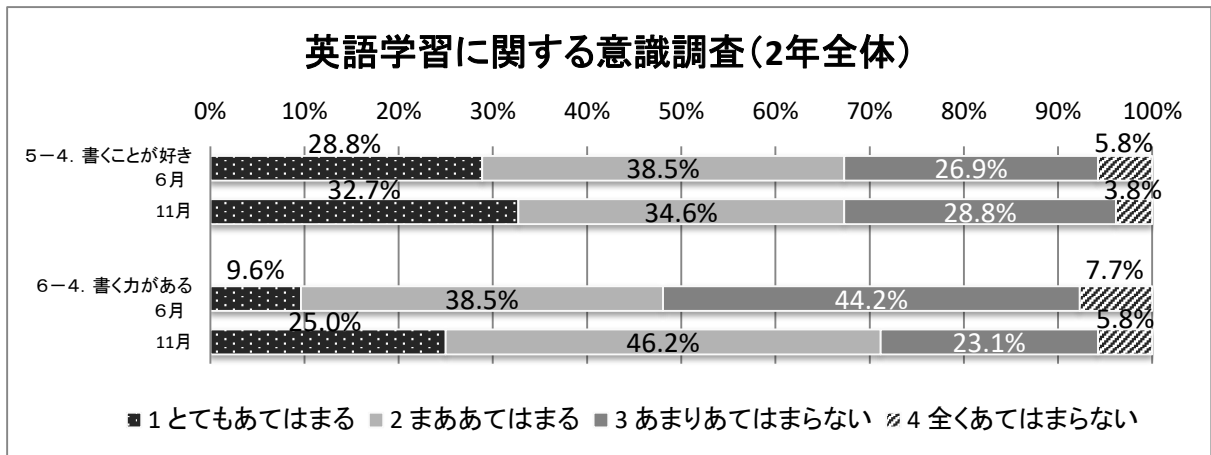


図5 英語学習に関する意識調査の事前・事後調査の比較 (項目5-4, 6-4)

検証授業の事前・事後のアンケートとして行った英語学習に関する意識調査(別添資料1参照)は、事前アンケートでは「書くこと」は好きだと感じているものの「書く力」が付いていると感じている生徒は少ないという結果であった。事後アンケートでは「書くこと」が好きだという割合にはほとんど変化が見られなかったが、「書く力」があると感じている生徒の割合が48.1%から71.2%と23.1%大幅に増加した。現時点では書いた文の正確さについては重点的にフィードバックをしていないので、生徒は書く分量が増えたことで書く力が付いたと感じているのではないかと考える。またトピックライティングや日記により書く活動に継続して取り組み、書くことに慣れたことで今までよりもすらすらと書けるようになったと感じている生徒もあり、書く量に加えて書く速さも生徒の意識の変容に影響があったと思われる。

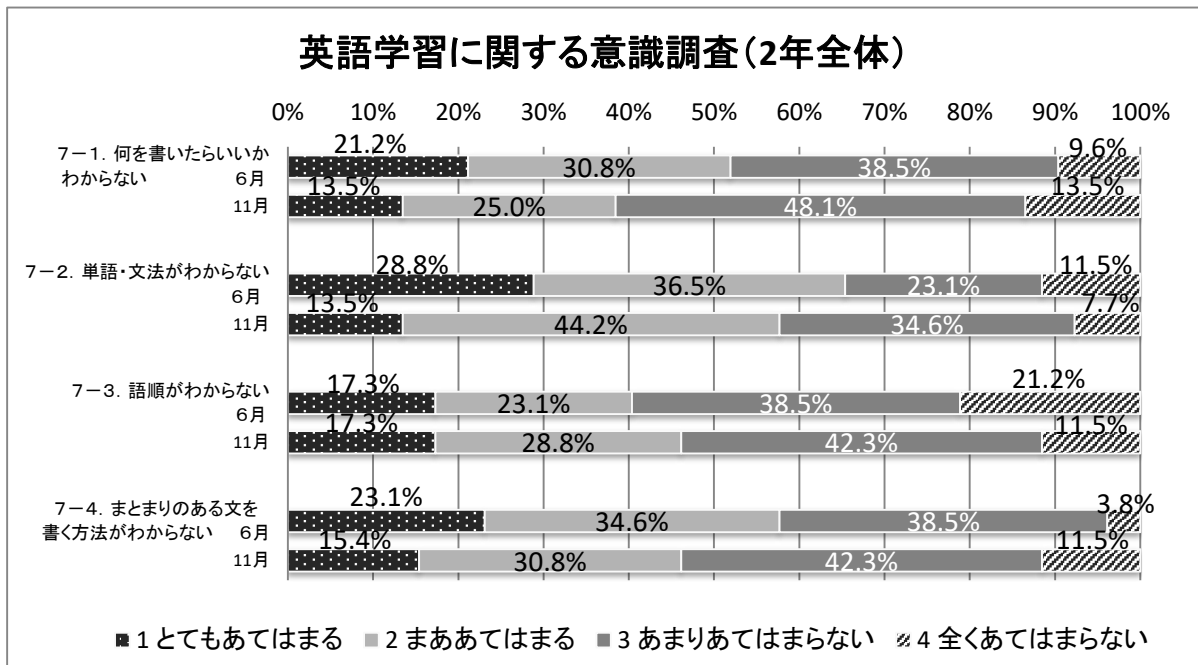


図6 英語学習に関する意識調査の事前・事後調査の比較 (項目7-1~4)

また「英語で書くときに困ること」に関する質問では、事前アンケートの時よりもそれぞれのことに困っている割合は少しずつ減少していた。「語順がわからない」という項目のみ増加しているが、授業が進み文法項目が増えるにつれ覚えるべき内容が増え、それらを整理しきれずに分からないと感じているのではないかと考える。

## イ 抽出生徒への聞き取り調査

検証授業後に抽出生徒（6名）への聞き取り調査を実施した。検証授業や検証授業の事前指導で行った活動に関する問いでは、「日記を書く活動」と「マッピングを用いて伝えたいことなどの情報を整理しながら英作文した活動」がまとまりのある文章を書く力を伸ばすために特に役に立ったと生徒が考えていることが分かった。「日記を書く活動」では、自分の行動について書くことが基本であるため、何を書けばよいか分からないということが少なく、数回の練習で、自分の行動だけでなく感想なども含めて、表現したいことを書けるようになったと感じていると推察される。「マッピングを用いて伝えたいことなどの情報を整理しながら英作文した活動」を通して生徒ができるようになったことや分かったことに関する回答には、情報を整理する、情報を選ぶ、情報をまとめるといった言葉が出てきた。英語で書く前に書こうとする内容について情報を整理する方法を学んだ結果、生徒はまとまりがある文章を書けるようになったと感じていることがうかがえた。「英語で書く力が付いたと思うとき」や「英語で書くときに困ること」に関する問いでは、正確さに関わる回答が多くあった。今までの指導や評価がスペルや文法の正確さを重視したものであったことの結果と考えられる。「英語を使って何ができるようになりたいか」という問いには、話せるようになりたいという答えが多かったが、書くことについても触れられており、生徒が英語を使って他者と関わりたいという気持ちをもっており、自分の気持ちや考えを発信したいと考えていることが分かった。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

本研究の成果として、3点挙げる。1点目はトピックライティングや日記といった継続的に書くことを通して、まとまりのある文章の構成やモデルを示すことで書き方を学ばせながら実際に書かせることにより、生徒はまとまりのある文章がどのようなものかに気付き、それを意識して書くようになったことである。モデル文や友だちの書いた文章を読むことで、まとまりのある文章を書くために必要な話題の広げ方や文と文のつながりのもたせ方を学んだ結果、自分の表現したいことにも生かせるようになったと考える。

2点目は、生徒にとって場面や状況が具体的で分かりやすいゴールを設定したことで、生徒は相手を意識して伝える情報や内容を整理するようになり、どのように伝えるかを考えながら書けるようになったことである。英語を使用する必然性のある活動を仕組むことで、生徒の意欲を高められた。またALTという具体的な相手を設定したことで、目標を達成するためにALTに自分の考えを分かりやすく伝えるための工夫ができたとも感じている。適切な場面設定を行った活動を通して、生徒の自分の考えを発信したいという気持ちを高め、自己表現の幅を広げていくことが実際のコミュニケーションで英語を運用できる力へとつながっていくと思われる。

3点目は、生徒の発達段階を踏まえ、文章の正確さではなく、書いた内容や書こうとする意欲に重点を置いた指導と評価を行ったことで、生徒の書く意欲を高められ、書く内容や量が充実したことである。生徒の書いた文章の内容や意欲に対して、文章のまとまりという点に着目し、その時点でできていることについて肯定的なコメントしたところ、意欲的に取り組む生徒が増えたと感じている。

### (2) 課題

課題としては3点挙げる。1点目は、文章の正確さに関する指導についてである。書いている内容や量、書こうとする意欲に重点を置いた指導と評価は、本研究の対象学年と時期においては有効であったが、今後は正確さについての指導も必要である。及川（2010）の研究では、「3年生へむけて徐々に正確さを求める指導に切り替えてゆく」とされていたが、生徒の学習実態に応じて、ふさわしい指導とその時期を検討する必要があると考えられる。

2点目は、目標、評価規準、評価基準を生徒と共有することである。生徒が主体的に学ぶために

は、具体的な目標を理解したうえで、そこに到達するために努力や工夫をしていくように仕組む必要があると考える。

3点目は、3学年の見通しを示す学習到達目標を設定し、指導と評価の一体化を図ることである。2点目の課題とも重なる部分であるが、目標と評価を指導者間、指導者と生徒間で共有するためには、その基となる学習到達目標が適切に設定されている必要がある。平成29年度現在、高知県のすべての中学校においてCAN-DOリスト（学習到達目標）は作成されているが、その達成状況を把握している学校は65.1%にとどまっており、作成されたCAN-DOリストが十分に活用されているとは言えない状況である。文部科学省は「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」において、「設定した目標が適切なものであったかどうかを検討し、必要に応じて、目標の内容や難易度を見直すといったPDCAサイクルを確立する」ということに言及している。目標と年間指導計画とを有機的に連動させ、目標の達成状況の把握と見直しの機会を予め設定しておくことなどでCAN-DOリストを活用した指導と評価の一体化を図る必要がある。

### (3) 今後の取組

まずは、学習到達目標の見直しを図る。新学習指導要領で示されたように、五つの領域別の目標と関連付けた学習到達目標を設定する必要がある。また、生徒の主体的・対話的で深い学びを通して生徒に求められる英語力を達成するために、目的のある言語活動を計画的に設定していく。そのうえで、それぞれの活動に応じた評価方法を考え、評価基準を作成し、必要に応じて評価を見直し、指導と評価の充実を図りたい。

「書くこと」の指導においては、生徒の書こうとする意欲を減退させてしまわないように、急激に正確さばかりを求めるのではなく、3年間の計画や新学習指導要領の「英語の特徴やきまりに関する事項」を踏まえて、段階的に正確さに関するフィードバックを取り入れていく。個別指導が必要となる場面も多くあることから、正確さを気にする生徒には早めに正確さに関するフィードバックを個別に与える等、効果的な機会を逃さず個に応じた指導を心掛けたい。

#### 【参考・引用文献】

- 文部科学省(平成20年9月)：中学校学習指導要領解説外国語編
- 文部科学省(平成23年6月)：国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策
- 文部科学省(平成25年3月)：各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き
- 文部科学省(平成28年8月)：次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(報告)
- 文部科学省(平成28年8月)：次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめのポイント
- 文部科学省(平成28年8月)：外国語ワーキンググループによる審議の取りまとめ
- 文部科学省(平成28年)：平成28年度英語教育改善のための英語力調査 報告書
- 文部科学省(平成29年3月)：中学校学習指導要領
- 文部科学省(平成29年7月)：中学校学習指導要領解説外国語編
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター(平成24年1月)：特定の課題に関する調査(英語：「書くこと」)調査結果(中学校)
- 高知県教育委員会(平成29年)：学力向上検証改善サイクルの確立に向けて—平成28年度高知県学力定着状況調査結果の概要—
- 内田浩樹(2015)：生徒の日本語発想を英語につなげる J-E エクササイズ、英語教育、2015年12月号 vol. 64、大修館書店、pp18-19
- 及川賢(2010)：英作文を通して見た中学生の英語熟達度発達過程、埼玉大学紀要(教育学部)、vol. 59、No. 2、pp1159-168
- 大井恭子・田畑光義・松井孝志(2008)：パラグラフ・ライティング指導入門、大修館書店
- 大塚謙二(2017)：教科書だけでここまでできる！最強の英語授業の作り方、学陽書房
- 北原延晃(2010)：英語授業の「幹」をつくる本 下巻、ベネッセコーポレーション
- 山本崇雄(2015)：生徒と共に創る「教えない」授業—自立した学習者の育成のためのアクティブ・ラーニング—、TEACHING ENGLISH NOW、vol. 31、三省堂、pp4-7
- 山本崇雄(2015)：はじめてのアクティブ・ラーニング！英語授業、学陽書房